

# 当世風騎士道物語として読む近代小説

— フライターク『貸しと借り』における「市民」の表象 —

北原 寛子

## 1. はじめに

『貸しと借り』Soll und Haben<sup>1</sup>は、1855年の復活祭にあわせて発表されたグスタフ・フライターク（1816-1895）による長編小説である。発表直後から好評を博しその年のうちにすでに版を重ね、現在にいたるまで広く読み続けられている。<sup>2</sup> 主人公アントン・ヴォールファールトはプロイセンの田

<sup>1</sup> 今回の研究には以下の版を用いた。

Gustav Freytag: Soll und Haben. Roman in sechs Büchern. Mit einem Nachwort von Helmut Winter. Waltrop und Leipzig; Manuscriptum 2002. 4. Auflage 2013. (以下Mと略記、頁数を算用数字で添える)。

この版を取り上げた理由は、現在入手可能な版のうち最新のものだからである。フライタークの作品は歴史批判版がまだ出版されていない。フライタークが最初に作品を発表していたライプツィヒのヒルツェル社Hirzelから全集は発行されているが、1887年からの発行となっており現在入手困難である。そのため、先行研究ではいくつかの版が併存している状態である。

<sup>2</sup> フロリアン・クロップは、T・E・カーターの研究に依拠して、この作品が1965年までに122万2000部が発行されたと述べている (Vgl. Florian Krobb, Einleitung: Soll und Haben nach 150 Jahren. In: Ders. (Hg.): 150 Jahre Soll und Haben. Studien zu Gustav Freytags kontroverser Roman. Würzburg 2005, S. 9-28, S. 9)。ペーター・ハインツ・フープリッヒが挙げている数字は75万3000部とより少ないが、それはこの作品の著作権が切れた1925年時点までに限ったことである (Vgl. Peter Heinz Hubrich: Gustav Freytag „Deutsche Ideologie“ in Soll und Haben. Kronberg Taunus 1974, S. 44)。同書でフープリッヒは、この作品がドイツで最も売れた近代小説であるという19世紀末のテキストをいくつか紹介している。クロップとフープリッヒの研究をあわせて推測すると、1925年からその後の40年間で50万部近くが発行されていたことになる。Vgl. Benedict Schofield: Gustav Freytag's „Soll und Haben“: Politics, Aesthetics and the Bestseller. In: The German Bestseller in the Late Nineteenth Century. Hg. von Charlotte Woodford und Benedict Schofield. New York 2012, S. 21-38.

舎町に住む青年であった。物語の冒頭で彼は父を亡くし、18歳の若さで首都ベルリンへ商人としての修業に旅立つ。その後いろいろな出来事が描かれ、彼が一人前の商人として認められるところで結末となる。

この作品は広く読まれてきただけでなく、問題あるテーマをさまざまに含んでいるために研究も多くなされてきた。たとえば商人を中心とした市民を取り上げて、その描かれ方や価値観について分析をおこなうものである。<sup>3</sup>

商人と一口にいても、商人同士の取引の中にドイツ人とユダヤ人を単なる善と悪の対立に帰して描いているために、人種的偏見にかかわる問題として検討している研究がとても多い。<sup>4</sup> この作品は1世紀にわたり人気を保ち続

<sup>3</sup> Vgl. E. McInnes: ‚Die Poesie des Geschäfts‘. Social Analysis and Polemic in Freytags ‚Soll und Haben‘. In: Formen realistischer Erzählkunst. Festschrift für Charlotte Jolles. In Honor of her 70th Birthday. Hg. von Jörg Thunecke. In conjunction with Eda Sogarra. Foreword by Philip Brady, S. 99–107. Christine Achinger Gespaltene Moderne. Gustav Freytags ‚Soll und Haben‘. Nation, Geschlecht und Judenbild. Würzburg 2007.

<sup>4</sup> Vgl. Katja Mellmann: ‚Detoured Reading‘. Understanding Literatur through the Eyes of Its Contemporaries. (A Case Study on Anti-Semitism in Gustav Freytag’s ‚Soll und Haben‘). In : Distant Reading. Topologies of German Culture in the Long Nineteenth Century. Hg. von Matt Erlin u. Lynne Tatlock. New York 2014, S. 301–331. John Ward: Jews in business and their representation in German literature 1827–1937. Oxford, Wien u. a. 2010, bes. Chapter Two: Citizens and Conmen, S. 61–91. Michael Schneider: Apologie des Bürgers. Zur Problematik von Rassismus und Antisemitismus in Gustav Freytags Roman ‚Soll und Haben‘. In: Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 25 (1981), S. 385–413. Ludwig Stockinger: ‚Polen als ‚grüne Stelle‘? Ästhetische und politische Implikationen des Polenbildes bei Gustav Freytag. In: Convivium. Germanisches Jahrbuch Polen 2001, S. 99–128. Klaus Christian Köhnke: Ein antisemitischer Autor wider Willen. Zu Gustav Freytags Roman Soll und Haben. In: Judentum, Antisemitismus und deutschsprachige Literatur vom 18. Jahrhundert bis zum Ersten Weltkrieg. Hg. von Hans Otto Horch u. Horst Denkler. Tübingen 1989, S. 130–147. Ulrich Kittstein: Vom Zwang poetischer Ordnungen. Die Rolle der jüdischen Figuren in Gustav Freytags ‚Soll und Haben‘ und Wilhelm Raabes ‚Der Hungerpastor‘. In: Poetische Ordnungen. Hg. von Ulrich Kittstein u. Stefani Kugler. Würzburg 2007, S. 61–92. Hans-Joachim Hahn: Antisemitismus und Antislawismus in Gustav Freytags ‚Soll und Haben‘ (1855). Ein deutscher Erinnerungsort aus Schlesien. In: Schlesische Erinnerungsorte. Hg. v. Marek Czapliński. Görlitz 2005, S. 122–137.

けたにもかかわらず、第二次世界大戦後はほとんど読まれなくなってしまった。戦前・戦中に国家社会主義政権の解釈が試みられたためであり、また現実に起こってしまった人類史上最悪の人道に対する犯罪行為へと文化的・精神的に導いてしまったイデオロギーと人種に関わる問題が、この作品を単純な娯楽として享受することを困難にしてしまったためである。

戦争犯罪との間に築かれてしまった忌まわしい関連のためにこの作品が一般読者の手の届く範囲からは一旦遠のいたとしても、文学研究の対象から消えることがなかった。その理由は、ビルドゥンクスロマンBildungsromanに数えられており、その分野で言及されることがあったためである。<sup>5</sup> アントンが職業に励むかたわら、英語のレッスンや読書、ダンスから服の着こなしにいたるまで、自分を向上させようとするさまざまな努力も描かれており、このような解釈は妥当と思われる。本研究も基本的にビルドゥンクスロマンについての研究の一環からこの作品に関心を寄せている。<sup>6</sup> しかし本プロジェクトでは、従来のビルドゥンクスロマン研究が主人公の成長物語としての基本的な枠組みの部分と、その水面下にあるドイツにおける小説理論進展の際に生じたさまざまな問題を区別せずに論じているのに対して、まずこの両者を区別して扱っている。そして付随するさまざまな意見を検討の対象とし、これらの諸問題を分類し、それぞれの発生と発展について分析、考察することを目的としている。議論すべき諸問題とは、1. 歴史と小説の区別をめぐるジャンル論、2. 現実と虚構をめぐる認識の近代化について、3. 小説についての理念が人々のアイデンティティーに与えた影響についての3点で

---

<sup>5</sup> この小説をビルドゥンクスロマンの枠組みで解釈する研究には次のような文献が挙げられる。Michael Kienzle: Der Erfolgsroman. Zur Kritik seiner poetische Ökonomie bei Gustav Freytag und E. Marlitt. Stuttgart 1975. Rolf Selbmann: Der deutsche Bildungsroman. 2., überarbeitete und erweiterte Auflage. Stuttgart 1994.

<sup>6</sup> 本研究は、以下の科研費の支援を受けた研究プロジェクトの一環である。[課題番号] 26770115 / [研究種目] 平成26年度 若手研究 (B) / [研究代表者] 北原寛子 / [研究課題] 18世紀から現在にいたるBildungsroman概念の展開に関する文献学的研究

ある。1と2は18世紀に小説の形式と概念が合意されていく過程で生じた問題であり、この過程で小説は登場人物の成長過程を描くことを目指し、人物の内面に立ち入って記述することが可能であるという今日のビルドゥンクスロマンの基本了解事項を生み出した。<sup>7</sup> 3は18世紀に成立した小説についての認識が、19世紀から20世紀にかけての精神文化に与えた影響に関連している。

『貸しと借り』については、第三の問題との関わりをなかで捉え、考察していくことになる。そのために、一度この作品を近代化した騎士道物語として解釈することを試みてみたい。なぜこの小説が文化の実態へ及ぼした作用を分析するにあたって騎士道物語の構図を確認しなくてはならないのか。その理由は、騎士道物語が近代小説の原形の一つだからである。古典的な娯楽の要素との共通点を探ることで、『貸しと借り』が娯楽的散文文学として読者に、つまり近代の社会に、緩慢ではあるが着実に働きかけてきた要因を見つけ出すことができるであろう。<sup>8</sup>

たしかにこの作品は表向きには主人公の立身出世物語であるが、彼の人格には最初から最後まで変わることがない部分を認めることもできる。そしてこの部分こそがこの作品の根本的な魅力を形成しているのである。物語の推進力となり、アントンという人物を構成する重要な要素は、彼がいろいろな面で優れた若者であるという前提である。具体的には見た目の感じのよさと、名誉を重んじ、奉仕を厭わない気高い心映えである。彼については冒頭の短い幼少期のエピソードからすでに、実直でまじめな基本の気質と、学校教師たちの賞讃を通じて表現される頭脳の優秀さ、落ち着きがありながらもいじめっ子からいじめられっ子を救う正義感の強さなど数々の美德を備えていることが読みとれる。最初から誰からも好かれる朗らかな青年として登場して

---

<sup>7</sup> これらの18世紀における小説理論発展の問題については、別の拙論で扱ってきたため、それらをご参照いただきたい。

<sup>8</sup> 商人の世界が美しく描きだされている要因を、ロマン主義文学との共通点を探り出すことで浮き彫りにしようとした研究もある。Vgl. Irmtraud Hnilica: Im Zauberkreis der großen Waage. Die Romantisierung des bürgerlichen Kaufmanns in Gustav Freytags „Soll und Haben“. Heidelberg 2012.

いるのである。

アントンのプラスの変化は、いふなれば表面的な変化に過ぎない。年月の経過とともに周囲の人々の信頼を得ていくことも、それは彼が能力を伸ばし、結果的に獲得したというよりも、彼に生得に備わっていた素質を周囲の人々に認識させていく過程なのである。経験を経てさまざまな困難を乗り越えているが、それは外的な要因でもたらされた問題であり、彼の内面の危機や能力不足が原因となって発生したのではない。経験を経て賢くなるというよりも、もともと才能に恵まれていた主人公がさまざまな場面で能力を遺憾なく発揮し続け、若さゆえに認められていなかった段階から、如才なく歳月を経てさまざまな出来事に遭遇することで周囲に認めらる過程が描かれているといった方が物語の本質に適っている。彼は皆から好かれつつ、一方ライバルであるファイテル・イツツヒには嫉妬されるといったヒーローの要件を十分に満たしているのである。

この小説は商人の経済活動を中心に描きながら、帳簿付けや商取引を現実の金銭欲にまみれた低俗な活動と卑屈にとらえるのではなく、あたかも理想の社会の実現を目指して健やかに前進しているかのような雰囲気包んでいる。商人であることと精神的な理想状態を保ち続けていることは、これまで矛盾する行為とみなされることが多かった。例えば、トーマス・マンがビルドゥンクスロマンは精神的かつ内面的な領域を扱うことが特徴であり長所であると述べている一方、この分野では「西側の小説」と彼が呼んでいるフランスやイギリスの作品で多く描かれる社会における人々の交流、政治的な活動など外界の要素が無意味で皮相と退けられていると指摘しているように、<sup>9</sup>商人であることは精神的な充溢に至る道が閉ざされていることと同じ意味であると考えられてきたからである。この考えの端緒となったのは、何をおいてもゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』であろう。ヴィルヘルムは裕福な商家の息子であり後継ぎになることを期待されていなが

---

<sup>9</sup> Thomas Mann: Gesammelte Werke. Frankfurt 1960. Bd. XI, S. 854f.

ら、当人はそのために演劇に従事する自由を制限されていると感じ、生きづらさを抱えている。このあたりの事情はヴィルヘルムが幼馴染で後に義理の弟になるヴェルナーにその辛さを打ち明ける有名な手紙に凝縮されている。そこにしたためられているのは、商人、市民のままでいることは自らの成長に制限を課すことであり、その限界を超えてよりよい人物、より優れた人物になるために演劇という芸術活動が必要であるという切実な願望である。こうしてヴィルヘルムは自分の希望の実現を目指して家業を放棄し、劇団に身を投じる。一方ヴェルナーは親族の期待に応えるべく家業に邁進する。彼はこのように正直な人生を歩んでいるにもかかわらず、久しぶりに登場する場面では、頭髮がはげ上がり頬がこけたみすぼらしい姿に変化したと記述される。反対にヴィルヘルムは同じ期間を芸術家にも商人にも貴族にも市民にもなりきることができない迷いの中で過ごしていたにもかかわらず、とりあえず恰幅がよくなりつややかな肌をして風貌が良くなったとヴェルナーを驚かせている。この場面で言及される両者の外見とは、長期にわたる精神的な態度や傾向を象徴していると考えられる。それはあたかも、商人であること、市民的な日常を送ることは、退屈さへの忍従であり、向上心の放棄を意味しているかのようである。

同様に、『貸しと借り』とほぼ同時期の1857年に発表されたシュティフターの『晩夏』でも、商人であることが人間の成長の可能性に対して否定的な影響を及ぼすことが含意されている。主人公ハインリヒ・ドレンドルフはヴィルヘルムと同様に裕福な商人の息子である。ヴィルヘルムが父の希望に反して芸術家、つまり詩人か俳優を志望するのは対照的に、ハインリヒは父の意志に従い、そしてそれは本人の素質や願望とも合致しているのだが、専門をもたない学者となり、幅広い教養を享受する人物になることを目指している。18世紀に描かれたヴィルヘルムが、商人にならないことで市民的であることを拒否し、貴族と交流し、最後には貴族の女性を娶ったのに対して、ハインリヒもたしかに貴族の女性ナターリエと結ばれるが、彼は社会階級を人間的な能力を発展させる妨げの主因とは見なしておらず、それよりもむしろ

鉱物をはじめとする自然や科学の研究という具体的な活動を通して、市民であることと知性や人格を鍛錬することを両立させようとしている。しかしあくまで商人であることと能力・才能の練磨は相反するものとしてあらかじめ除外されているのである。

『貸しと借り』では主人公が高校を卒業し、大学入学資格まで得ながら（M227）公務員であった父の職を継ぐことなく自ら進んで商人になろうとしたこと、そしてその商人志望の市民の若者が好意的に描かれるという点で独自の性格を獲得している。『晩夏』と比較すると、フライタークの作品は同時期とは思えないほど、より新しい時代の特徴であふれている。『晩夏』の半分の舞台となるウィーンの街は、裕福なハインリヒの実家の家庭的で静かな室内や友人の宝石商の広くはないが感じのいい店内、それに加えてきらびやかな劇場が取り上げられているくらいである。これらはいずれも貴族と富裕層の市民が活動する場であり、秩序と調和、美と静けさに彩られている。リーザハ男爵の城は田舎にあるが、バラであふれた美しい庭やイタリアから持ち帰った古代の彫刻など洗練された趣味の室内が細かく描写される。ヒロインのナターリエは長い裾のドレスを引きづって静かに歩き回るとやかな女性であり、散歩で庭を歩く以外に、主な移動手段は馬車である。一方『貸しと借り』ではベルリンを舞台にして同様に商家を中心に描かれているというのに、その商家は取引のために中庭を行き来する大男の人夫たち、物資がぎっしりと詰まった樽や箱が右に左に動く様、帳場で几帳面に働く男たちの姿が描かれ、にぎやかである。さらに都市のうらびれた路地も見過ごされることはない。田舎では小作農や兵士の姿など、貴族と官吏の世界とは程遠い、庶民的で広々とした世界が展開している。ヒロインにしても、男爵令嬢レノーレは田舎の領地では小型とはいえ自分用の馬に乗って移動する。彼女は一風変わったお転婆娘になりそうだと母親に危惧され、貴族の娘としてふさわしい教育を受けるべくベルリンに連れてこられるが、傘と鞆を自分の手に持ち、そして自分の足で路上を歩き学校に通っている。お転婆娘を貴族の洗練された令嬢へと脱皮させるための矯正教育であるにもかかわらず、男爵夫妻に

とって「学校」や「徒歩移動」といった市民的な行為を14歳の娘にさせることが当然と言わんばかりである。19世紀半ばの作品でありながら、『貸しと借り』はこの後に続く20世紀に向かって進行している世界を映し出しているのである。

このように、より近代的な傾向を内包する作品でありながら、この作品の基本的な構図は騎士道物語と共通している。ヘーゲルは『美学講義』において、小説を騎士道物語が近代社会に置きかえられたものであるという見方を提示したが、この構図は『貸しと借り』に漂う独特の雰囲気を形成している独自の価値観を分析するために役に立つ。そこでまずヘーゲル美学における騎士道物語と小説の関連について考察し、<sup>10</sup> この枠組みがどのように『貸しと借り』にあてはまるのかを提示したい。そして、どうして近代化した騎士道物語であることが精神文化の実態に作用しうるのかについて論じていくことにしよう。

## 2. ヘーゲル美学における騎士道物語と小説

ヘーゲルの規定によれば、近代の小説とは騎士道物語が当世風に置き換えられたものであるとされている。主人公は騎士から市民階級の若者に置き換えられ、同時に騎士道の世界で跋扈していた怪物が、官僚組織や軍隊、裁判所といった政治・国家体制に姿を変えて主人公に襲いかかり、その戦闘ともいべき葛藤状態が描き出されるというのが基本の対応関係である。<sup>11</sup> 騎士道Rittertumと騎士道物語Rittergeschichteはもちろん同じものではない。騎士道は歴史上の事実を指し、騎士道物語はそれらをもとに詩的想像を加えて、より美しくより理想的に再構成された作品である。両者の関係は、人物とそ

<sup>10</sup> ヘーゲル美学とこの作品の関連について、先に挙げたAchingenの研究でも言及されている。

<sup>11</sup> Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel: Vorlesungen über die Ästhetik. II. Werke in zwanzig Bänden. Bd. 14. Frankfurt (M) 1970, S. 219f.

れを映す歪んだ鏡になぞらえることができる。鏡に映った像が実態を反映しつつも同時にデフォルメされていることに留意しなければならない。とはいえ、やはり実態と像は連動している。ヘーゲルは騎士道をロマン的芸術形式の根本に据えた。ヘーゲルは芸術の理想と個人を歴哲学的に捉え、その関係性の変化から象徴的芸術形式、古典的芸術形式、ロマン的芸術形式の3つの段階を設定した。象徴的芸術形式においては、個人にとって美の理想や神といったものが人間性よりもはるかに大きく全体を統べていたのに対し、古典的芸術形式では人間の内面と芸術の理想が調和し、美の最高状態に達している。ロマン的芸術形式に至って、神や美といった高次の要素は人間の内面に入り込み、ひとりひとりが心の中の理想と向き合い、尊厳ある個人として活動することになる。外界よりも内面における真理の探究が至上命題とされ、各々に努力が求められている。騎士道はこうした無限の内面を負った人間の行動を規定しているという。騎士道において重視されているのは、名誉Ehre、愛Liebe、忠誠心Treueの3つである。名誉は無限の個人の尊厳が外的世界に現れ出たものと考えられている。個人の地位や身分に関わること、自発的なもののみならず他者から受ける行為、さらに主君や祖国、親族に対してなど、名誉の問題は外的な社会活動に関わらず、身内において、そして学問や芸術などの内的な領域におけるまで、幅広く関わっている。愛は個人が他の個人を求め、自己を犠牲にすることで結果的に自己への承認を得、精神をより一層拡大させることを可能にしている。忠誠心は王侯や皇帝など、個人より社会的に上位に立つ存在のために自己を犠牲にして秩序を守ることであるとヘーゲルは述べている。<sup>12</sup>

ヘーゲルは、騎士道物語は近代においてその基本的な構造を保ったまま、形式を小説に変えていると主張している。基本的な構造とは、怪物退治に象徴される冒険と姫探しとして描かれる恋愛である。このモチーフをヘーゲルのロマン的芸術形式の理念に沿って解釈するならば、次のようになるだろう。

---

<sup>12</sup> Ebd., S. 192.

怪物退治とは、怪物との力による対決とその結果として社会秩序を回復することである。これは近代では登場人物が社会・政治的な場面でいざこざに巻き込まれることであり、そのなかで名誉の保持のみならずさらなる向上を目指しつつ、内面の葛藤を克服して理想の実現を目指す行為、あるいは理想と現実を調和させる方法を見出すことであると解釈できるであろう。姫探しはそのままヘーゲルが述べているように嫁探しのプロセスへと移し替えて読むことができる。

またさらにヘーゲル的な騎士道解釈に加えて、騎士道の歴史的な研究も参照することができる。<sup>13</sup> 騎士の行為の本質を成しているのは、服従と忠誠による奉仕であった。主君とキリスト教、そして婦人に奉仕し、彼らのために役に立つことが騎士が守るべき道だった。騎士は彼の行為がそのまま教会と神への奉仕という宗教的な意味を帯びるために、評判や対面といったいわゆる世間体にも心を砕かねばならなかった。これが騎士にとっての名誉の問題の別の側面であったのである。

### 3. 『貸しと借り』における騎士道物語的特徴—名誉と忠誠心

主人公アントン・ヴォールファールトは、ヴィルヘルム・マイスターのように長い独白をしたり、手紙を書いたりせず、また『晩夏』のハインリヒ・ドレンドルフのように一人称の語りで自己の内面からの視点で物語を構築したりはしない。アントンが何を考え、どのように感じているのかは、時折彼が他者の呼びかけにこたえて返事をするまで、読者には知る余地がない。彼の表象を形成しているのは、そうしたわずかな発言の他は、まわりの人々が彼をどのように見ていたのかという記述である。

アントンが他人の発言を聞いて非常に驚き、狼狽する場面がある。それは

---

<sup>13</sup> 騎士道の歴史的な観点からの見解については、次の書籍を参考にした。Vgl. J・M・ファン・ウインター『騎士 その理想と現実』 佐藤牧夫、渡部治雄訳 東京書籍出版 1982年、49頁。

彼にまつわるよからぬ噂を耳にした商店主シュレーターが、その真偽を確認する箇所である。よからぬ噂とは、アントンは両親の子ではなく、どこかの貴人の私生児なのではないかという疑いである。彼は貴族の館で夜毎に行なわれるダンスのレッスンに盛装して参加していた。人々は、一介の市民である彼にどうしてそのような社交の場への参加が財政的に可能なのかを訝しく思い、疑いを口にしていたのである。アントンはバルデレック夫人宅への訪問を止める決意をし、彼女のもとへ挨拶に出かける。そこで彼はきちんと礼儀をわきまえつつ、しかし決然と暇乞いする中で次のように述べる。

[...]私は、今は亡きオスタウの財務官ヴォールファールトの息子です。

私は両親から誠実で品行方正な名前のほかは、ほとんど何も相続しておりません。(M192f)

アントンがこの場面で行なったことは、社会的な縁故やそこから生じる経済上の利益といった自己の欲のために虚偽を利用することよりも、真実を貫くことで両親の汚名をそそぐという名誉のための自己犠牲である。これはまさにヘーゲルが騎士道の中心にすえた名誉のための行為なのである。アントンにとっては、金持ちの隠し子と勘違いされて有利な扱いを受けるよりは、すでに亡くなってしまったとはいえ両親の品行方正さを主張することの方がはるかに大事な行為なのである。アントンの正直な態度表明はその場にいた人々に、崇高にpathetisch響き、ロートザッテル男爵は彼に敬意を覚えたのであった。(M199)

そもそもアントンがバルデレック夫人の館の敷居をまたぐことができたのは、爵位を持つ同僚フリッツ・フィンクの手引によってである。フィンクはハンブルクの豪商の息子にしてアメリカの裕福な親戚の相続人であり、シュレーター商会へは修業のため見習いとして送りこまれている。彼は経済的に恵まれおり、世にはばかることがない。アメリカの親戚の下で暮らしていた際は、船乗りにな身をやつしてアフリカまで出かけたなりするなど、大胆で自由

な気性である。結局アントンの不名誉なうわさは、フィンクが同僚を貴族に紹介する際にまわりの人々に吹聴した罪がないが根拠もない話に元があったことがわかり、すべては丸く収まる。

フィンクがアントンに肩入れするきっかけとなった出来事も、アントンの騎士的精神に由来するものである。フィンクはシュレーター商会においても、形式的には見習いであったが好きなように振る舞っていた。ある日ヨルダン氏がアントンに手紙を急いで配達するように命じた際、フィンクがヨルダン氏に向かって「この子をちょっと銃器職人のところへやって下さいよ。この役立たず者に僕のピストルを届けに行ってもらいたいです」(M84)と割って入る。アントンはヨルダン氏に用命を変えないように懇願すると、フィンクは「なんで嫌なんだい、ひよっこちゃん」(M84)と尊大な態度を見せた。これに対しアントンは

僕はあなたの下僕じゃない。[...] あなたのために行くようにとお願いしてくれるのなら、行かなくもなかったでしょうよ。でもそんな不当になされた指図には従いません。(M84)

と、毅然して反論した。この一件で侮辱されたと感じたアントンは、フィンクに決闘を申し込みたいとまで思いつめる。しかしまわりの取りなしに加え、アントンを傷つけたことを反省したフィンクが人々の前で謝罪を口にしたために、事件は解決する。この一連の出来事は、アントンの正義感や物おじしない堂々とした態度を周囲に印象付け、彼の有用さを認めさせるきっかけとなった。そして見習い期間が2年という異例の短さで帳場の正職員へと出世するとともに、フィンクにも一目置かれるようになり、彼と仕事時間外に親しく交わるようになるのである。フィンクがアントンを貴族の邸宅にまで同伴させていたのは、このいきさつの結果アントンを信頼し、見込んだ上のことなのであった。

アントンが裕福で尊大なフィンクの不当な要求に応えなかったことも、当

世風騎士道の実行と捉えることができる。アントンは、フィンクに「役立たず」Taugenichtsや「ひよっこちゃん」Hähnchenなど屈辱的な呼び方をされたにもかかわらず、その点に対しては反論せずに忍従している。しかし命令の不当性には譲歩せず拒絶することによって、彼の精神の広さと強さの両方を示しえた。正義を貫き、仕える主人に服従し奉仕することによって名誉が保持されるだけでなく、さらに名声を高めることにもつながった。ここで主人公の魅力を際立たせている原則がまさに騎士道に準じているのである。

この小説が研究される際にしばしば言及される貴族と市民の関係についても、騎士道の立場から解釈することができる。貴族のフィンクがアントンに肩入れをして、彼の趣味の洗練にまで手を貸すことが非現実的だという指摘もあるが、<sup>14</sup> 騎士はそもそも歴史的に、その魅力的な特徴によって身分の差を超えて広がったのである。ドイツでは11世紀ごろから、王侯などの支配者が直轄地の運営にあたり、土地の管理や行事の遂行、防衛といった重要な職務を不自由身分に属する領地の住人にまかせていた。ミニストリアーレと呼ばれたこうした人々は、主人の愛顧次第で立身出世が定められていたため、主人への恩義が深く、勤めを忠実に果たした。12世紀から13世紀にかけて、ただの兵卒程度の意味しか持たなかった騎士という言葉が、勇敢さや高潔さと結び付けられるようになったという。<sup>15</sup> そして「詩人たちが騎士道を口をきわめて賛美したために貴族階級の者たちも騎士として奉仕することを別に恥じる必要がなくなり、従ってまた詩人たちも作品の中にでてくる主人公や国王に対しても〈騎士〉の呼称を与え始めるようになったのである（13世紀初め）。読者である貴族は、知らず知らずのうちにその影響を受けた。〈騎士〉がそれまで身分の卑しい者の呼称とされていたのに、貴族たちも作中人物と同じように自分を〈騎士〉と呼んでもらいたがるようになった」。<sup>16</sup> このように、騎士は本来卑しい身分を指していたのであるが、忠実な奉仕を遂行する

<sup>14</sup> Vgl. P. H. Hubrich, a. a. O., S. 40.

<sup>15</sup> Vgl. ウィンター, 前掲書, 19および35頁。

<sup>16</sup> 同書, 38頁。

ことで高貴な存在と認められ、やがて王侯貴族でさえ彼らと同一視されることを望むまでに名声を高めることができた。『貸しと借り』のなかで描かれているアントンの成功は、騎士がその名声を確立したのと同じ仕組みなのである。彼が市民階級であったとしても、正義に準じる強い意志や上司に恭順な態度で奉仕することなどの騎士的美徳を発揮すると、読者はこの小説を当世風騎士道物語として享受することができるのである。

この小説には貴族たちも登場しているが、市民は伸びやかに行動する様が描かれているのに対応して、貴族たちはどことなく頼りなく不安げである。その頼りなさげな特徴を代表しているのが、先ほども言及したロートザッテル男爵である。彼は領地から上がる収益が必要な支出に見合わず頭を抱えている。そこに世知にたけたエーレントール氏のような商人が現れ、土地の債権を担保に資金繰りするようにと勧める。男爵は世襲の財産によって裕福であり、「持つ者」の利益を享受してはいるが、支出にまわす現金を工面する必要に迫られ、不安を抱えながらも貴族のプライドを一旦わきに置き、その助言に従う。男爵が内心おびえながら行なう経済的な取引は、爵位よりも金銭が幅を利かせる時代の到来を予感させている。

騎士道物語には戦の冒険がつきものであるが、『借りと貸し』にもアントンが大活躍する戦闘シーンが組み込まれている。ロートザッテル男爵は土地経営の失敗から、ポーランドで売却に出されていたとある貴族の領地へ移らざるをえなくなる。アントンはこの領地の管理人となり、農民たちの家を回って暮らしぶりを調査したり、男爵一家の住居となる館の手入れをしたりと忙しく働くことになった。そんな折、ポーランドで革命が勃発する。政情が不安定になり、暗い影は男爵の領地にも忍び寄って来た。ある時アントンが森林管理官とロスミンの町に出ていると、武装した男たちが現れ口々にドイツ人排斥を叫んでいた。彼は身の危険を感じるが、うろたえるようなことはしない。彼はすぐにその場にいたドイツ人たちに広場の泉のそばに集まるように指示を出し、集団行動で危険を回避しようとする。アントンと森林管理官は人々を誘導し、無事に宿屋までたどり着くことができた。このようにアン

トンはとっさの出来事にもかかわらず、すぐさま人々に的確な指示をだす頼れる指導者としての素質を遺憾なく発揮している。その上アントンは大尉とともに騒動の首謀者を捕えるための出陣に参加している。

アントンは次の瞬間を待っている間も、こめかみで血がずきずき痛むのを感じていた。ついに太鼓の連打音が聞こえてきて、それに大声の歓声が続いた。ライオンのように市民たちは中庭を跳ねまわった。大尉が先頭でサーベルを振りかざし、彼の横にアントンがいた。(M611)

負傷しながらも戦場に赴き出陣するとは、まさに騎士道的武勇の勲しそのものである。このようにアントンは正義、名誉、忠誠などの騎士道的な価値観に則って生活するだけでなく、騎士道物語の登場人物であるかのごとく剣を振りかざしながら戦うのである。

物語ではこの地域の政情がさらに不安定さを増し、戦争状態に突入する。敵軍の襲来が警戒され、領地の人々は男爵の館に避難して籠城している。<sup>17</sup>砲弾が飛び交い、人々は危険に身を潜めている。次第に食べ物は底を尽き、飲み水にも困るようになってきた。そんな時、アントンはフィンクと共に人々に指示をだした。男性たちはフィンクの主導で武器の手入れをおこなった。女性たちはアントンの指示のもと、水なしでできる範囲で城を掃除した。「籠

---

<sup>17</sup> 来るべき困難に備えていろいろな手はずを整えた折、その土地で農業に従事している旧知のカールに、アントンに自分自身にもっと留意してほしいと言葉をかけられる。「ここでもそこでも、ポーランドの経済全体は、あなたが命をかける価値なんかありません。私たちは、あなたに何かあったらと心配しています」(M686)。これに対して「僕は自分の義務を果たすよ」(M686)と答える。危険にあっても義務を遂行することが騎士道の奉仕の精神を体現している。それと同時に、これは市民的な勤勉の観念とも通底している。さらにアントンは、男爵令嬢レノーレからも「あなたは私たちにふさわしいよりも御自分を犠牲になさっているわ。私たちはあなたに対して感謝が足りないわ。ほかのところにはいらしたほうがお幸せでしょうに」(M692)ということばをかけられる。カールとレノーレが異口同音に発する言葉から、アントンが彼らの間で信頼され、大切な人物とみなされていることが浮き彫りにされている。

城している人々を何時間か活動させておくことはいい効果をもたらした」(M723)と記されている。ただの掃除の場面ではあるが、食料が不足して危機がいよいよ高まっている中で行なわれたために特別の意味が読みとれる。つまりどのような危機的状況にあっても冷静さを失わない強い精神と、清潔と秩序をできるかぎり保とうと努力する向上心の表現と読むことができるのである。騎士道精神で重視されている自己を高貴に保つ努力は、そのまま市民的な勤勉の価値へと通じており、読者は騎士道で通用した古典的な生活原則を、小説のなかで楽しみつつ市民的領域へ移し替えて受け取ることができるのである。

#### 4. 精神文化の実態への作用—「空想上の価値観」

『貸しと借り』を騎士道物語の枠組みの中で再解釈しようとした意図は、この作品が19世紀から20世紀のドイツに与えた影響について考察するためである。先に言及したように、すでに政治的な関係から分析された先行研究の成果が上がっている。それにたいして本論では、「市民」のアイデンティティーがどのように高められたのかを、政治思想的な側面からではなく、詩学の伝統に関連付けて分析をおこなった。それは小説が叙事詩の形式で書かれた騎士道物語が、近代に散文へと解体したところにも起源をもつからである。ヘーゲルは美学講義のなかで小説を市民的叙事詩と定義したが、ここから小説は市民的なるものが展開される形式であるという理論的な前提が形成された。そして『貸しと借り』においては、吟遊詩人たちが英雄的に描いたがために王侯でさえも羨望するようになった騎士のイメージを市民に移し替えることで、貴族でさえも羨望する市民像を商人アントンに具象化したのである。騎士道物語は騎士道の現実からは乖離し、成立した時代も数百年の隔りがある。過去の出来事から虚構の領域へと転じていくことで、騎士道物語は「空想上の能力」とでも言うべき魔法が有効になり、「空想上の出来事」としか言いようのない奇跡が展開することも許容された。騎士道物語の枠組みが近

代小説に移し替えられることで発生したのは、市民が貴族に優越するという「空想上の価値観」である。『貸しと借り』の中の価値観は信じ難く非現実の色合いを帯びているが、小説つまり文学とはそのような非現実の要素が自然な前提となりうる領域なのである。中世の騎士が現実存在していた身である一方で、騎士道物語に描かれた登場人物たちが非凡な運の良さや怪力といったあまり現実的ではない属性を備えているように、『貸しと借り』の商人たちは、商人というきわめて現実的で凡庸な職業に就いていると同時に、理想的な有能性と行動力を与えられているのである。商人が貴族より冷静で行動力と判断力に長けており、精神的に優越しているように描き出されているのはこのためである。しかしこれはいかにも現実であり得そうだと読者を納得させることができなければ、近代の合理的思考を獲得した読者たちには受け入れられないはずである。貴族や市民といった身分や社会的地位によって人間を判別することに意味がなくなり、身分よりも金銭が大きな力を持つ社会が来るという暗雲のような予言も含みこんでいる。登場する市民が官吏や職人、芸術家ではなく商人であるのは、金銭を扱う能力に長けているからである。

新しい価値観は文学作品という形で具体的に提示されることによって、理想の共有者を増やす効果がある。この価値観が広く共有されるようになる過程で、しだいに理想と現実の厳密な区別は消滅し、既成事実へと変化する。文学における想像力、つまり詩的想像には現実の世界を変える力がある。なぜなら想像力はあるべき社会、来るべき世界を論理的に探求することが可能であり、詩はそれを言語によって表現する技術だからである。文学は現実を反映して創作されるとともに、未来の価値観を生み出す力をもつ。「空想上の価値観」はやがて現実の価値観へと取り込まれていくのである。文学に想像で描かれることは、根拠のない絵空事だとして軽んじられてきた節がある。無為と怠惰のなせる業であり、社会に対しては娯楽以上の貢献がないという批判もしばしばなされてきた。しかし、作品を想像して描き出すことは、これから来るべき世界を構築する価値観の形成に寄与することを、ヌス

バウムは詩的正義の実現を訴える文脈で哲学的に示した。<sup>18</sup> また近年、脳科学の分野では想像が実際の行動に与える影響について徐々に研究を進めてきている。<sup>19</sup> 人間の脳では、想像と実行で回路の一部を共有しており、そのため想像することが実際に行動へ経験的な影響を与える可能性が示唆されている。そうして、イメージトレーニングの重要性が脳科学の知見からあらためて主張されている。この研究がさらに進展すれば、文学の中で想像して描きだされたイメージが、実際の文化に与えている影響を脳科学からも再確認できるようになる日がいずれ来ることが予測される。

『借りと貸し』は、当世風騎士道物語として商人の世界を描くことで、読者たち、つまり市民たちに、自分たちこそが社会を救う当世の騎士であるという自信と誇りを与えたのである。主人公は商人であるにもかかわらず外見上の麗しさのために貴族の女性たちからも褒めそやされるほどである。彼は優雅な振る舞いと仕事における冷静さと機敏さを併せ持った、いわば英雄的なイメージで提示されている。商人であることは、ヴィルヘルム・マイスターがおよそ半世紀前に嘆いたような卑屈で限界のある存在ではなく、むしろ彼の長所の根拠となっているかのように描かれている。市民や商人が社会で一番価値のある存在であるという価値観が言外の枠組みを構成し、物語の進展を支えている。19世紀半ばのドイツ社会で市民が実際にどれだけ有能であったかは別にして、そうなることを切望して野心に燃え、自分たちの有能さを信じたい読者たち、つまり市民たちがいたことはたしかである。この小説は内面描写が少なく、代わりに写実的な側面が強調されており現実的な世界が構築されているが、それは魔法や奇跡的な要素は表れないながらも、「市民は優秀な存在である」という当時の市民階級の人々の願望がいわば価値のファンタジーとでも言うべき、現実とは異なる「空想的価値観」という独自

---

<sup>18</sup> Martha C. Nussbaum: Poetic Justice. The Literary Imagination and Public Life. Boston 1995.

<sup>19</sup> Vgl. Alvaro Pascual-Leone: The brain that makes music and is charged by it. In: Isabelle Peretz u. Robert Zatorre (Hg.): The Cognitive Neuroscience of Music. Oxford 2003, S. 396-409.

の基準が適応された虚構世界が構築されているのである。この作品に提示されている教養Bildungは、現実的で商業的である。アントンが学ぶ外国語もラテン語やギリシャ語などの古典言語でも、フランス語のように貴族的な社交の言語でもなく、商取引のための英語であるし、ダンスの練習や服装の趣味をよくすること、食事のマナーをもってして教養とみなしている。これらの技術を洗練させることは悪いことではないが、それだけで人格の形成を成し遂げられるという考えは皮相であり、楽観的すぎる。これらに対して批判的な価値観が欠如していることで、逆にこの作品で理想化されていた価値観は、その頃まだ実現しえない空想の状態に留まっていることも示唆している。